aRT FUL

2025.07 | 82

松本市美術館 NEWS［あーとふる］

ART EXHIBITION GUIDE

当館学芸員　澁田見 彰

1

日本でも高い人気を誇るロイヤル コペンハーゲンは、今から250年前、デンマーク王室庇護のもと1775年に開窯し、優れた釉下技術と独自のデザインによる上質な磁器の生産で早くから国際的な評価を獲得しました。コバルトブルーの小花文様の染付と放射状の縦縞（フルーテッド）の凹凸が施された「ブルーフルーテッド」は創業当時から同窯を象徴するデザインとして継承され、世界中の人々を魅了し続けています。

デンマークでは、絵画的表現のロイヤル コペンハーゲンと、彫塑的表現のビング オー グレンダールが切磋琢磨しながら技術と表現方法を高めあってきました。また、隣国のスウェーデンでは、北欧最古（1726年開窯）の陶窯で、スウェーデン王室御用達のロールストランドが品格ある陶器を送り出しています。独創的でありながら実用的なデザインは、ノーベル賞の晩餐会のテーブルウェアとしてもその期待に応えています。

本展覧会では、デンマークとスウェーデンに焦点をあて、日欧の貴重なプライベートコレクションから選りすぐった約200点の19世紀末から20世紀の陶磁器、銀器、ガラス器を中心に煌めく北欧のデザインをご紹介します。

産業と芸術の融合を模索しつつ品質を高めた北欧デザインは、今もその新鮮さを失わず、日常生活の大切さが改めて意識される現代においても魅力的です。北欧の豊かな暮らしと美しさを、アール・ヌーヴォーからモダンへとデザインの変遷とともにお楽しみください。

3

Through the eyes of Japanese and European collectors
Royal Copenhagen and Scandinavian Design
Art Nouveau to Modern

2

4

7

6

5

日欧プライベートコレクション

ロイヤル コペンハーゲンと北欧デザインの煌めき

アール・ヌーヴォーからモダンへ

会　　期／2025年7月12日(土)～9月23日(火・祝)
開館時間／9:00～17:00(入場は16:30まで)
休 館 日／月曜日 (休日の場合は翌平日) ※8月12日(火)、9月22日(月)は開館

観 覧 料／一般1,500円、大学生・70歳以上の松本市民1,000円
※電子チケット購入の場合は各100円引き　※高校生以下無料、障がい者手帳携帯者とその介助者1名無料　※20名以上の団体は窓口料金から各200円引き(当日窓口販売のみ)
※大学生・70歳以上の松本市民は、観覧当日、証明書(免許証、学生証等)の呈示が必要

主催／松本市美術館　共催／信濃毎日新聞社、市民タイムス、MGプレス　後援／デンマーク王国大使館、スウェーデン大使館　企画協力／株式会社ブレーントラスト

1.《眠り猫置物》ロイヤル コペンハーゲン 原型：エリック・ニールセン ペインター:IVX 1958年 塩川コレクション　2.《花文花瓶》ロールストランド メーラ・アンデルベリ 1903-1907年 塩川コレクション　3.《ネックレス no.160、ペンダント no.135》ジョージ ジェンセン ヴィヴィアンナ・トールン・ビューロ＝ヒューベ 1968年頃(デザイン)、制作1945年以降 個人蔵　4.《皿(ブルーフルーテッド)》ロイヤル コペンハーゲン ペインター：マティアス・ハンセン・ウォルストロップ 1785年頃 塩川コレクション　5.《花飾文花瓶》ロイヤル コペンハーゲン ヤニー・ソフィー・メイヤー 1910年 塩川コレクション　6.《ブローチ no.306》ジョージ ジェンセン　ヘニング・コッペル　1947年(デザイン)、制作1945年以降　個人蔵　Photo Michael Whiteway　7.《花瓶(コローラ)》コスタ ヴィッケ・リンドストランド 1950年代 個人蔵 Photo Michael Whiteway

47回

ポルカドット号探検記

東西をむすぶ青い花

松本市美術館館長　小川 稔

革新技術をめぐる各国間の熾烈(しれつ)な競争は、今に始まったことではない。食卓に欠かせない磁器だが、東アジア、中東、欧州の三地域で相互に引用、模倣が繰り返されてきた歴史がある。磁器を英語でチャイナと呼ぶように、中国発祥の革新技術は隣国日本ばかりでなく遠く欧州の王侯貴族たちをも惹きつけた。14世紀の元時代、白い磁器に藍色の絵付け（青花）を可能にしたのが、中東イスラム圏で産するコバルト顔料（呉須(ごす)）だった。青い文様で彩られた大皿は、オスマン・トルコに輸出され、イスタンブールのトプカプ宮殿に膨大なコレクションが遺(のこ)されている。

大航海時代、インド洋の交易を支配したオランダ船が持ち帰った中国磁器が欧州各国でブームを引き起こし、ドイツ、マイセン窯などからこれを真似た豪華なテーブルウェアが次々に生まれた。今回の特別展で紹介されるデンマーク、ロイヤル コペンハーゲンの美しい食器にも、そのような壮大な旅の記憶が隠されている。

参考 《青花唐草文稜花皿》中国景徳鎮窯　明時代　15世紀　東京国立博物館蔵
Image: TNM Image Archives

白地に控えめな青の文様は、その上に盛られる各国料理とよく調和し、食器装飾のスタンダードとして長く愛されてきた。この文様も古代にルーツのある「唐草」とみることができる。唐草文様は地中海周辺で生まれ、ペルシア、インド、中央アジアのシルクロードを通って奈良の寺院に届けられた。

今も日々の食卓でこの普遍的デザインが私たちに生命の律動を伝えてくれる。

Relay Essay

ギャラリートーク

当館学芸員　大島 武

企画展ごとに実施する「学芸員によるギャラリートーク」。コロナ禍や大規模改修の休館により暫(しばら)くなかったが、2年半ほど前から復活して今は以前のとおり開催している。

先日、自身が担当の「ロートレック展」で5回実施した。ポスターで人気を博した画家だが、本展出品作の肝となるのは直筆の素描（スケッチやデッサン）や版画の数々。選び抜かれた線と大胆な構図で彩色されたポスターが生み出される背景にある膨大な素描の魅力、19世紀末の華やかなパリの歓楽街で生き、36歳という生涯を駆け抜けた画家の人生や時代背景などを紹介できればと臨んだ。

事前準備では、約40分の時間をどう配分するか、どの作品で何を語るか、あらかじめ要点を絞って構想を練り、閉館時間にシミュレーションを行う。いざ本番、参加者全員にワイヤレスイヤホンを装着いただきスタート。挨拶から始まり、展覧会の概要や注意事項の説明の後、会場内へ。章ごとに主だった作品や作家の人生について話しながら進むが、スペースの狭い場所もある。トークに参加されていない鑑賞者もいらっしゃるため、ギャラリートークによって通路を塞がないよう誘導を促す。参加者の反応を見ながら話す内容を自在に取捨選択できる域には達しないが、トーク終了時の温かい拍手に救われて次への励みとなっている。

十数年前、学芸員経験が豊富な前館長に「ギャラリートーク千回！」と、その心得を教わった。道は遥か遠く、いまだ模索しながらのギャラリートークだが、一期一会の機会に満足いただけるよう努めたいと思う。

松本市美術館 NEWS
あーとふる 編集・発行

松本市美術館
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART

〒390-0811 長野県松本市中央4-2-22
tel 0263-39-7400 fax 0263-39-3400
https://matsumoto-artmuse.jp

松本市美術館公式 SNSはこちらから▶　X　Instagram

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

身近なART「松本だるま」

当館学芸員　原澤 知也

地味な私の部屋の中に派手な赤色のだるまが飾ってある。これは、1月に松本の市街地で行われる「あめ市」の屋台で購入した「松本だるま」である。以前、松本のあめ市を調査した際に購入してから、今の物は三代目のだるまだ。だるまは買い替えるときに前の物より大きい物を買った方がよいと聞き、一番小さいサイズから始め、今は高さ20センチほどの大きさだ。

松本だるまは、少しオレンジがかった肌に、腹には「大當」の文字、そして眉と頬にふさふさとした毛が付けられているのが特徴だ。普段よく目にする福だるまと違い、柔和な顔をしており、丸いフォルムも相まって現代でいえば「ゆるキャラ」のような見た目だ。しかし、この松本だるまには松本ならではの歴史がある。明治から大正時代にかけ養蚕業が盛んだった松本では、繭がたくさんとれる年のことを「大當」といっていた。それを願って「大當」の文字が腹に書かれている。また、ふさふさな「眉」の毛も蚕の「繭」にかけているとのこと。当時の主要産業の発展と商売繁盛の願いを背負って作られた歴史を聞くと、少しゆるい見た目も威厳に満ちた表情に見えてくる。

これ以上大きくなると置き場所に困ると思いながら、松本ならではの工芸品を今しばらく買い続けていきたい。

ミュージアムショップ便り

当館ミュージアムショップ 店長　鬼頭 千佳

ミュージアムショップのショッピング袋を、2024年秋に一新しました。デザインは松本市内に拠点を置き、全国で活躍している vent de moe（ヴァン・ドゥ・モエ）の代表、デザイナーの小林萌さん。ハンドルつき紙袋は山々の稜線、晴天の空、太陽、清らかな水源、水玉、澄んだ空気の星空、月といった松本市の自然環境や風景を喚起させるデザインです。また美術館やアートが身近な存在であることをイメージできるよう、手書きのイラストや文字で構成されています。小判抜き手提げ袋とマチなし紙袋大小は、松本市の豊かな文化土壌と〈心をひらく学びの森〉である美術館をイメージした水彩ドローイング。袋をお渡しするとき、お客さまから “とっても素敵！”と声が上がる様子を幾度となく目にし、我々スタッフも思わず笑みがこぼれます。この袋を開けるとき、展示室での感動や松本市来訪の楽しい出来事が蘇ってきたら大変嬉しく思います。

同じデザインを使用したボールペンも発売を開始しました。絵具の質感を指先で感じることができる特殊印刷。スリムなボディは携帯するのにも使い勝手がよく、贈り物や記念の品としてお薦めしたい一品です。

木製ボールペン
「学びの森」「星空」各1,650円　価格は2025年6月1日現在　※改定する可能性があります。

視る

《女鳥羽川》

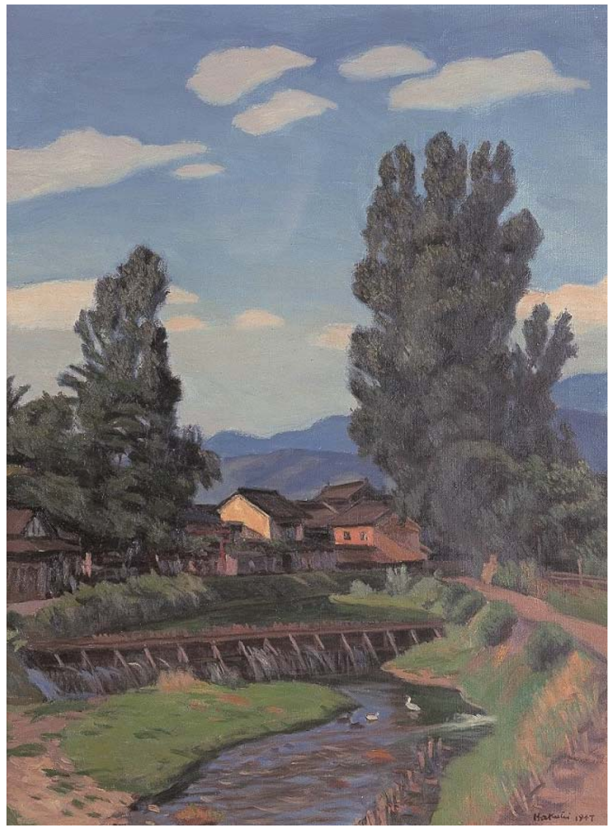
当館学芸員　中澤 聡

石井柏亭（本名・満吉）は、東京生まれの画家。浅井忠に洋画を学ぶと本格的に画家の道を歩みはじめ、以降は中央画壇の中心的存在として多彩な活動を展開した。歌人、詩人、評論家、教育者としても知られる。松本とゆかりの深い画家のひとりでもある。疎開を機に松本に居を構えると、この地をモチーフとした優作を多く手がけた。さらに美術団体の設立や後進の育成、地方における博物館等施設の必要性を説き、家蔵の作品を松本市に寄贈するなど、美術振興にも尽力した。

本作は、第9回一水会展や柏亭自身が作品選定をした古希記念展にも出品された。女鳥羽川は松本の中心市街地をゆるやかに流れる河川である。市民はもとより観光客で賑わうが、古くは暴れ川として知られ、松本城の外堀としての機能を果たした時代もある。柏亭が画題として選んだのは、川の下流から女鳥羽橋方面をのぞむ一景であった。

画面右のポプラの大木が、縦長の画面を強調する。対岸の樹木と歪曲する川の流れは画面に奥行きを、堰から勢いよく落ちる水と上流の穏やかな水面の対比が画中に変化を与える。綿菓子のように浮かぶのは夏の積雲であろうか。強い日差しを受け、木々の陰は一層濃さを増す。平明な自然描写を得意とした柏亭らしい作品だ。

一見すると平和な画面だが、戦争の跡も残る。画面中央の家並みの黄褐色は、戦時中の空襲を避けるために迷彩されたのだという。本作の制作から80年弱。ポプラの大木はとうの昔に伐採され、今はマンションなどのビルが立ち並ぶ。



作　　者	石井柏亭（1882－1958年）
作 品 名	女鳥羽川
制 作 年	1947年
技法・材質	油彩・キャンバス
サ イ ズ	60.0×45.0cm

今秋、石井柏亭の作品が一堂に会する展覧会を開催します。
是非ご覧ください。（会期：2025年10月11日～12月7日）

Workshop report

松本の様々な会場で工芸にまつわる展示やワークショップなどが開催される「工芸の五月」。美術館では、異形の宴「あそび心の蒔絵」、建築家とめぐる城下町みずのタイムトラベルを開催しました。

異形の宴「あそび心の蒔絵」

昨年、震災と水害の二重被災となった輪島。そこを拠点とする漆芸職人集団「彦十蒔絵」の手しごとを紹介する展覧会。伝統的な輪島塗の技術に、現代の感覚や遊び心を取り入れた漆芸作品を展示。中には、本物の工具そっくりの作品や、焼きたての鯛焼きにしか見えない作品など、これも漆なのかと驚くものもあり、輪島塗の知られざる魅力を多くの来場者のみなさまにも感じていただけたのではないかと思います。

建築家とめぐる城下町みずのタイムトラベル

〈旧町巡り 本町編〉

建築家や学生たちの案内で市内の工芸、建築、湧水などを巡る人気のツアー。今回は本町を中心に天神小路から伊勢町までを古地図と見比べながら歩きました。まちの形跡から歴史や地形、産業について知り、松本の魅力を再発見する楽しいひと時となりました。